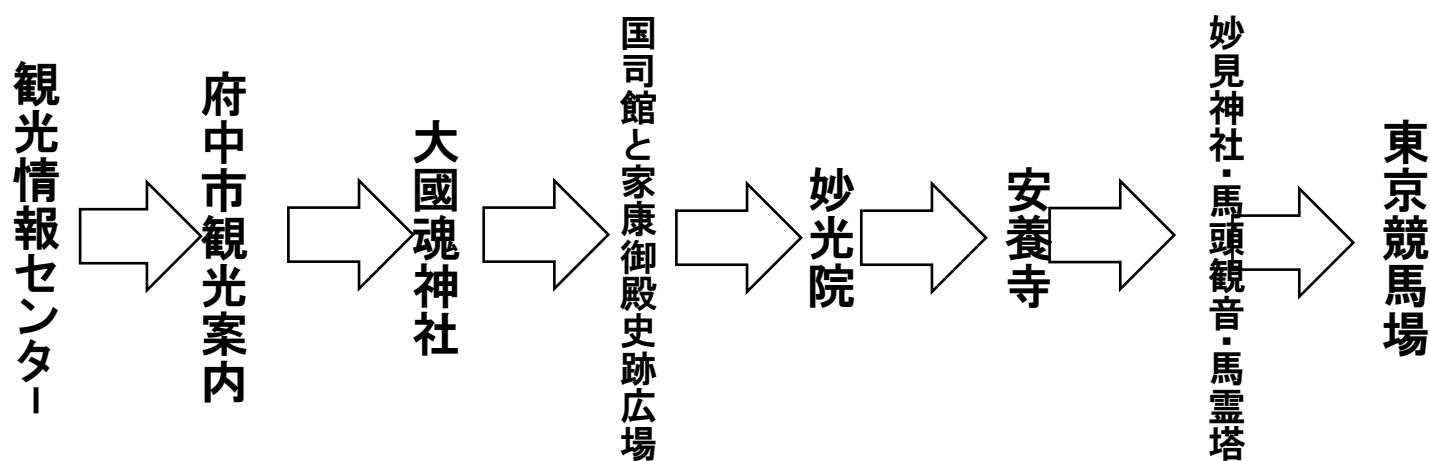


市内観光ミニツアーガイドマニュアル

古代から現代を巡る

C 府中の歴史コース



目安	10:00	10:10	10:35	11:05	11:20	11:35	11:50
	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩
	10:10	10:30	11:00	11:15	11:30	11:40	12:00

第一印象を大切に！

- ① 普段の体調管理で健康第一
- ② 笑顔で挨拶、笑顔で案内
- ③ 元気な声ではっきりと

緊急・事故時の対応

- ① 急病・怪我には、先ず応急処置を
- ② 病院、医師、ご家族への通報を
- ③ 第一報を観光情報センターへ

出発前の挨拶

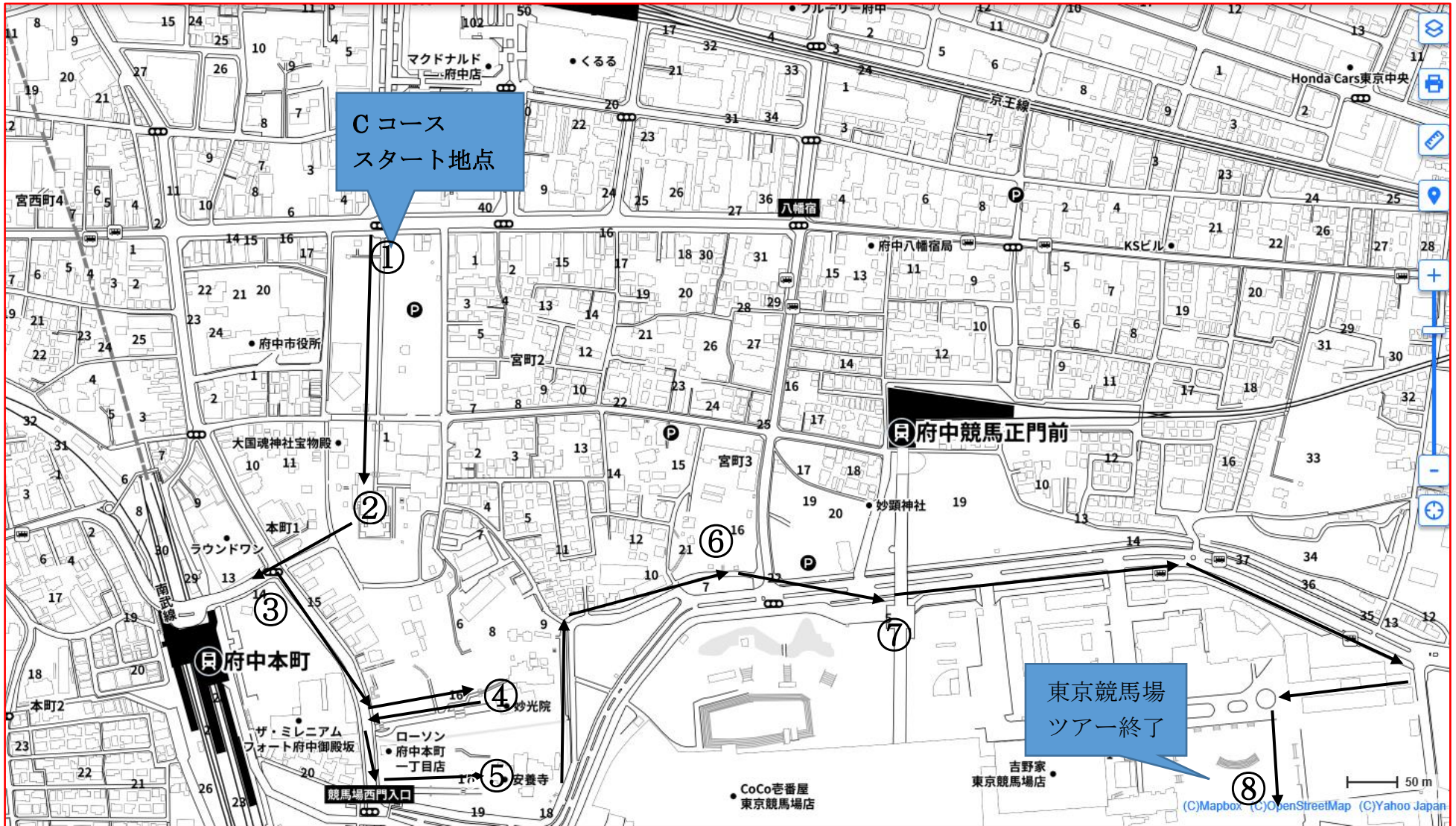
- ① 自己紹介
- ② コースの説明
- ③ 案内中のお願いと注意事項
 - ・夏場の水分補給、冬場のトイレ
 - ・建物側の通行と自転車の注意

解散方法について

- ① 解散後の個別の案内は行わない
- ② 参加者の帰りの交通手段を説明する
- ③ 解説チラシ、ミニツアーチラシを配布し、友人・知人へのミニツアー参加勧奨を依頼する
- ④ 観光情報センターに戻り「実施報告書」を提出する

C 古代から現代を巡る 府中の歴史コース

NO	スポット	解説ポイント	備考
	観光情報センター (10:00) 出発		トイレ
1	府中市観光案内 (10:00～10:10)	<ul style="list-style-type: none"> ・府中市概要 (面積、人口、標高、府中宿、一里塚、鉄道、駅など) 	
2	大國魂神社 (10:10～10:30)	<ul style="list-style-type: none"> ・大國魂神社、武蔵総社六所宮。 (詳細はAコースで説明。Aコース参加勧奨。) ・七不思議、くらやみ祭。 	くらやみ祭や七不思議を中心に説明。
3	国司館と家康御殿史跡広場 (10:35～11:00)	<ul style="list-style-type: none"> ・広場の説明板、国司館の復元模型。 ・徳川家康御殿史跡、三葉葵紋鬼瓦の出土。 ・VRスコープを楽しんで頂く。 	ツアー出発前にVRの予約が必要 (電話：365-1615)。 休憩・トイレ
4	妙光院 (11:05～11:15)	<ul style="list-style-type: none"> ・妙光院の起源、真如法親王。 ・北条氏、家康との関係。寺宝の説明。 ・関良雪、夢見地藏、小金井小次郎。 	
5	安養寺 (11:20～11:30)	<ul style="list-style-type: none"> ・安養寺の起源。矢部甚五碑。 ・高麗門、上林白草居の句碑。本堂、観音堂の案内。 ・たぬきのお坊さんのお話。 	
6	妙見神社・馬頭観音・馬霊塔 (11:35～11:40)	<ul style="list-style-type: none"> ・妙見神社の説明。 ・馬頭観音の移された経緯等。 ・馬霊塔の案内。 	
7	東京競馬場	<ul style="list-style-type: none"> ・東京競馬場が府中へ移転して経緯等。 	
8	(11:50～12:00)	<ul style="list-style-type: none"> ・場内の設備、博物館等の説明。 ・井田是政の墓。 	



市内観光ミニツアー：
古代から現代を巡る
C府中の歴史コース

- ①府中市観光案内 ②大國魂神社 ③国司館と家康御殿史跡広場 ④妙光院
- ⑤安養寺 ⑥馬頭観音 ⑦東京競馬場正門 ⑧東京競馬場内

府中市観光案内

府中市概要

市名は律令時代に武蔵国の国府が置かれたことに由来している。

府中市は東京都のほぼ中央に位置し、日本橋から西方約30kmの所にある。

市域は東西8.75km、南北6.7km、面積約29km²である。

海拔は北の武蔵台が最高82mで浅間山は約80m。市の西端は海拔約70m、東端は約40mと西から東に緩やかに傾斜している。

市の南側は多摩川が流れている。北側には国分寺崖線、南側には立川崖線（府中崖線）があり、比高差8～15mほどのハケが東西に形成されている。この崖線を「ハケ」と呼んでいる。数万年前に古い多摩川が削って出来たものである。

市の人口は約26万人で都内の市町村では3番目の人口である。

市内には鉄道4路線（京王線、JR武蔵野線、JR南武線、西武多摩川線）が運行され、14駅がある。JR南武線、西武多摩川線は、共に多摩川の河原で採取した砂利を運搬する目的で開業した。府中最古の鉄道は、明治43年開業の東京砂利鉄道。この鉄道も多摩川の砂利運搬に利用されたが、国鉄下河原線を経て、昭和51年の武蔵野線開業時に廃線となり、今は下河原緑道となっている。

市内には大國魂神社、高安寺等多くの神社・寺がある。また、北に3億円事件で有名な府中刑務所、東には日本最大の公園墓地の都立多磨霊園、南には日本最大のJRA東京競馬場がある。ラグビーのまち府中と標榜しているが、母体企業のサントリー（東京サントリーサンゴリアス）、東芝（東芝ブレイブルーパス東京）をはじめ多数の工場が立地している。

大國魂神社のくらやみ祭と七不思議

くらやみ祭

例大祭は、古代律令時代の「国府祭」を受け継ぎ、4月30日品川海上禊祓式、5月2日御鏡磨式、3日競馬式、4日御綱式、5日神輿渡御、6日早朝の還御の儀及び鎮座祭で終了する。奇祭「くらやみ祭」として有名である。

関東三大奇祭として有名です。（他の関東三大奇祭：川崎市の金山神社「かなまら祭」・茅ヶ崎市内の各地区の神社の神輿が集結して行われる「浜降祭」）

大國魂神社の例大祭は、毎年5月5日午前零時にすべての灯を消して行われたことから「くらやみ祭」と呼ばれている。尊いが故に見ることを許されないとする、古来の儀礼に起因すると伝わっている。くらやみ祭はこの武蔵国の五穀豊穰と国土安穏を祈る国府祭が起源です。平成22年(2010年)東京都指定無形民俗文化財に指定されました。

「政治」を「祭りごと」と呼ぶことから分かるように、古代の政治は、神と関わっていて、国府祭が起源のくらやみ祭は、国府の役人による最も重要な政治的行事だった。この「くらやみ祭」も江戸時代になって甲州街道の宿場として栄えるようになって、現在の例大祭に近くなり、一般市民も楽しむようになった。

(4月30日～5月6日)

4月30日 品川海上禊祓式 (みそぎはらい)

「汐盛り」とも呼ばれる神事であり、神職一行が品川海上に出て身を清めるとともに、清めの汐水を神社に持ち帰り、大祭期間中の朝夕潔斎(心身を清めておく)時にはこの汐水を使用する。ここから暗闇祭の一連の行事が始まる。

5月1日 祈晴祭 大会期間中の安全と共に雨の降らない事を祈る祭典。

5月2日 御鏡磨式 神輿に付ける鏡8枚を塩で磨き清める儀式。

5月3日 競馬式 (こまくらべ)

旧甲州街道を一之駒から六之駒、6頭が150mの距離を3往復する。

5月4日 御綱祭 (おつなさい)

神輿に飾りの綱を掛け神輿をお祓いする祭典、この日にお祓いをしてから初めて綱が掛けられ御霊がお移りになる準備を終了する。

5月5日 例大祭 午前10時

年中行事で最も重要な祭儀、祭に関わる人が一堂に会し神恩に感謝する。

宮乃咩神社奉幣 午後2時 境内摂社宮之咩神社に行き奉幣行事を行う。

動座祭 (どうざさい) 午後3時30分

御霊を御本殿より、神輿に移す事を神前に報告する祭典。(一般非公開)

神輿渡御 (くらやみ祭のメイン) 午後6時

花火の合図とともに6張りの大太鼓が打ち鳴らされ、8基の神輿は白丁を身にまとった威勢の良い担ぎ手と大太鼓に導かれ、御旅所まで渡御する。

坪宮奉幣 午後8時30分 境外末社、坪宮に奉幣の儀式を行う儀式。

野口仮屋の儀 午後10時10分頃

大國魂大神が当地に降臨した時、野口家に一泊の宿を求めた故事に基づく事柄を具現する神事。宮司と神職は野口の仮屋に向かい、野口氏の接待を受ける儀式を行う。

流鏝馬の儀 午後10時30分頃

宮司は野口の仮屋から神馬に乗って御旅所へ戻り、その北門前で馬上から弓を引き射る神事。流鏝馬の儀では矢が必ず的に当たるので、当社では「やぶさめあたり矢」という名前で御神矢を授与している。

5月6日 神輿還御

早朝午前4時に各神輿が御旅所を出発し、午前7時半までに神社境内に還る。

鎮座祭 午前9時頃

還ってきた神輿から御霊を本殿に納め、無事大祭が終了した事を報告する祭典。暗闇祭の終了となる。(一般非公開)

大國魂神社の七不思議

大國魂神社には昔からその歴史を物語る七不思議と呼ばれる伝説がある

御供田の苗（ごくでんのなえ）

かつては、現在の競馬場の敷地内に神社の御供田があり、そこで「くらやみ祭」の翌日5月6日に「御田植え祭」という神事が行われていました。御供田に苗を1株でも植えれば、その年はまったく病気もせず健康でいられ、自分の家の農作物も豊作になると信じられていたので、人々は競って持ってきた苗を植えました。そして田植えが終わると裸の子供たちが、田んぼの中で相撲をとるのが習わしであったが、翌朝になると、相撲で荒らされた苗が不思議にも真っ直ぐに起き、収穫時期になると農民が持ち寄った各種の苗が、皆一斉に穂を出したという事です。

今も毎年御田植え祭は行われている。

樅の雫（もみのしずく）

これは拝殿前にある樅の木から四季絶えることなく雨のように雫が降ってくるという伝説です。この不思議な樅の木は、今はなくなってしまいました。

大杉の根

昔、参道の両端には数十本の大杉がそびえていました。杉の木は大きくなると、根が地表に出てゴツゴツとした姿を見せますが、その大杉の根が、昔から参道に一本の姿も見せたこともないという伝説です。今は、杉が枯れてなくなっている。

境内の鳥たち

近年までは神社の境内には、鳥・鷺・鶉等の鳥類がたくさん生息していました。しかし、これらの鳥類は、本殿などの社殿に決して糞などを落とすことがなかったと言われている。

矢竹の根（やたけのね）

これは源頼朝が挙兵の際、関東の兵士を神社の前に集めて戦勝を祈願したときに背負っていたえびら箆のうわ矢を抜き、奉納のために、さして根付いたと言われる拝殿の前にある矢竹のことで、すでに幾歳月を過ぎた今日でも、石囲いの外には竹の根が少しも出ることがないという伝説である。

大銀杏の蜷貝（おおいちょうのにながい）

本殿裏にある大銀杏の根元に蜷貝が生育し、これを煎じて飲むと、出産後の乳の出が良くなると云われている。

境内に松の木なし

境内には松の木が一本もなく、また植樹してもすぐに枯れてしまうと言われている。これはまだ現世の神として散歩しているときの話です、大國魂の神様と八幡様が「どうだい大國さん、2人で武蔵野の野原に行こう」ということで出かけたものの暗くなっても宿が見当たりません、そのうち八幡さんは「ここで待っている、俺が宿を探してくる」と言って出かけましたが帰ってきません、待ちぼうけを受けた大國様は「まつはういものつらいものまつは大嫌いだ、まつのは嫌だ」と言われたそうである。ここから大國魂神社では待つを松にたとえて、植物の松を嫌うようになったのだと言い、今でも境内には松の木は一本もなく、植えてもすぐに枯れてしまうと言われている。また府中では正月の門松にも松を使わない習慣が残っている。

国司館と家康御殿史跡広場

国司館跡

J R府中本町駅前地区は、立川段丘崖が南に張り出した台地上にあり、南西への眺望に優れた景勝の地である。

発掘調査は2008年から2011年にかけて実施され、飛鳥～奈良時代（7世紀～8世紀前半）にかけての5棟の大型掘立柱建物が発見された。これらの建物群は、東西南北の柱筋をそろえて、規則正しく配置されている。大國魂神社付近に造営された国衙は8世紀前半に成立しているが、発見された建物群は、概ねその直前に相当することになり、古代の地方行政制度が整備され、諸国に国府が設置された初期の遺跡と云える。諸国国府跡の発掘で確実に8世紀前半をさかのぼる国府中枢施設の事例は未だ知られておらず、この年代の国府では定型的な役所の施設は成立していないと考えられている。これを裏付けてくれるのが墨書土器（口館）の出土である。この時代の国司館は、国司の単なる居宅ではなく、居宅と役所が分化せず、同居していた可能性が大きい。国司館は都から赴任する国司の居宅兼執務室である。

国司の定員は国の等級により違いがあったが、武蔵国は21郡を管轄する「大国」であり、「^{かみ}守」を筆頭に「^{すけ}介」、「^{じょう}掾」2名、「^{さかん}目」2名、「^{ししゅう}史生」3名が都より派遣され、それぞれが館を構え、また時期によっては移動することも想定されるから造営された国司館は相当の数にのぼることになる。段丘崖の上下に2つの国司館が発見されているが台地上の国司館は、7世紀後半頃から8世紀前半まで機能したと推定できるが、これらを取り囲む区割り施設はない。一方、低地の国司館は、建物群が重複し、複数回の建て替えが行われており、溝が取り囲み、8世紀後半から9世紀前半まで機能したと推定できる。

国府の実像は、発掘調査が雄弁に物語ってくれるが、実はこの地は、国衙推定地であった「御殿地」である。その名の謂われは、江戸時代初期に徳川将軍家の「御殿」が置かれていたことにある。この「御殿地」が国衙推定地に挙げられたのは、江戸時代後期にさかのぼる。近世後期に編纂された地誌「武蔵名勝図会」などに国造や国司の居宅とか、官庁の跡と記されている。その上で徳川家康がここに「御殿」を造営したのは、こうしたゆかりの地だとまで述べている。

典拠 府中市郷土の森博物館 ブックレット17 よみがえる古代武蔵国府

家康御殿跡

J R府中本町駅付近に「御殿地」と呼ばれる一画がある。徳川将軍家が鷹狩の際に宿泊、休息した「御殿」の跡地と伝承された所である。2008年～2011年にかけて発掘調査が行われ、古代国司の居宅が姿を現し、古代武蔵国府関連遺跡として注目された。それと共に、江戸時代初頭の遺構と遺物も発見され「御殿」に関するものとして大きな話題を集めた。なかんずく、三葉葵紋鬼瓦の出土は衝撃的で徳川将軍家の御殿であったことを証明してくれた。徳川将軍家は、鷹狩などの際の宿泊、休息施設として「御殿」及び「御茶屋」を各地に建設した。家康御殿はその一つであり、家康が利用した御殿・御茶屋の数は60近くもあると云う。

これまでの「家康御殿」造営に関する根本史料は、文政6年(1823)成立の「武蔵名勝図会」の記述に基づいている。即ち、近年、古文書、古記録の精読により、奥州仕置きの帰路、秀吉自らが府中に「御座所」を造らせた可能性が指摘されており、確証はないがこの秀吉説は妥当性が高いと考えられる。(資料 家康御殿近年の考察参照) 小田原北条氏滅亡後、秀吉は鎌倉、江戸を経由し奥州仕置きに向かい、天正18年(1590)8月13日会津を立ち、宇都宮、古河経由で小田原に戻っている。古河、小田原間のルートは不明だが府中を通った可能性が高い。家康は7月18日に江戸に入ったものの8月4日には宇都宮に居たものと見られ、秀吉とほぼ同じ動きをしているようである。

発掘区域は1万2600㎡に及び、発掘された遺構は、掘立柱建物跡、掘立柱塀跡、井戸跡、段切状遺構、鍛冶炉跡などである。広大な土地を塀で区切り、性格や機能が異なる施設を内包していたことが窺える。しかし礎石建物の痕跡は検出されず、御殿の中心的な建物は不明のままである。調査区域の西側はJ R府中本町駅によって削られていることも確かである。発見された各種の遺構は、主軸方位の違いから大きく2時期の変遷が推測される。60年ほどの間に大規模な改築があったことになる。出土遺物は、将軍家に関わる遺跡としては貧弱としか言えない。その反面、瓦や銅製の飾り金具の出土は、壮麗な建物の存在を物語る。改築の問題もあるので、当初からあったかはともかく、小規模な御殿と呼ぶに相応しい建物があつたと推測できる。この御殿は、正保3年(1646)10月の府中宿大火で焼失し、以後再建されていない。元和2年(1616)4月駿府で家康は死去。1周忌後、元和3年3月から約1か月かけて久能山から日光山に家康の神柩は遷座、東照宮に祀られる。神柩の移送コースは、何故か、江戸を経由せず平塚から北上、相模、武蔵を縦走する。家康直筆の鷹狩予定表と同じく、鷹狩を楽しんだ地を再訪しているかのようである。この遷座に供奉した公家の烏丸光廣が残した「日光山紀行」によれば、府中御殿に3月21日に到着、翌22日も逗留し、盛大な法要が執行されたようである。現在、大國魂神社境内に東照宮が祀られている。元和4年(1618)家康の神柩がとどまった御殿の仮殿を六所宮境内に移し祀ったのが創建と伝わる。

典拠 府中市郷土の森博物館 ブックレット19 徳川御殿

妙光院

当山は本覚山真如寺妙光院と号し、本尊は行基大師が刻んだ延命地蔵菩薩を安置する。

真言宗豊山派、総本山長谷寺の直末寺（総本山に直属する末寺）である。

妙光院の歴史は古く、貞観元年(859)真如法親王の開山と伝えられ、真言宗の古刹です。真如法親王は、平城天皇の第三皇子であり、高岳親王と呼ばれていましたが、世の無常を感じて仏門に入り、のちに高野山で弘法大師の十大弟子の1人として名を広めたそうです。第14世の住職時、仁和寺(京都)の門末となったが、100年くらい前に長谷寺(奈良)の門末となった、格式ある寺院である。その為か、代々この寺は高德の名僧が多い。

戦国時代の武将、八王子城主、北条氏照も帰依し(神仏や高僧などのすぐれた者を信じ、それに寄りすぎる事)、当寺で護摩供養をされた際、寺側から品物を、氏照から妙光院に宛てた2通の礼状も残っているそうです。又、江戸時代にも、家康・家光に厚く帰依され、数々の品物を下賜され、寺宝として今につたえられている。末寺門徒二十数ヶ寺を擁し、幕府よりご朱印15石の寄進があり、家康、家光が狩猟の都度立ち寄ったと言われている。

本堂は二度の火災、寛永11年(1634)、明治15年(1882)で焼失、昭和42年に再建した。

寺宝として「金銅蓮華形磬(都重宝)」がある。金銅蓮華形磬は南北朝時代(1331~1392)の作と言われる珍しいものであり、読経する際に打ち鳴らす楽器の一種で、大阪の四天王寺に同形のものが残されていると言われている。

通用門の「本覚山」の扁額は、享保3年(1718)深見玄岱(書家・儒者・医家)の書である。深見玄岱の墓所は多磨霊園にある。(新井白石の推挙で幕府に召し抱えられる)

真如法親王 (生没年不詳)

第51代平城天皇の第3皇子、俗名高岳親王は大和4年(809)4月平城天皇が弟、嵯峨天皇(神野新王)に譲位したとき皇太子となる。(平城天皇は桓武天皇の第1皇子)

平城天皇の寵厚く、権勢の座にあった藤原薬子が平城天皇の退位後、兄藤原仲成とともに再度実権を握ろうと、嵯峨天皇の廃立、平城上皇の重祚(一度退位した天皇が再び皇位につくこと)を図って兵を挙げようとしたが発覚して鎮圧され、嵯峨天皇により高岳親王は皇太子を廃される。

まもなく出家し、東大寺に入り、法名を真中、後に真如と改める。空海に密教を学び、斉衡2年(855)修理東大寺仏司検校に任ぜられる。貞観3年(861)功を終え、入唐の許可を得て貞観4年(862)7月大宰府を60人と共に発し、9月明州に到着した。貞観6年(864)2月洛陽、5月長安に入る。長安では青龍寺の宝全から月胎蔵界、金剛界の法を受ける。

この頃、法名を編明と改める。更に宗義(宗派の根本となる教義)を研究のため、天竺(インド)を志し、貞観7年(865)正月従者3人と共に天竺に向かう。羅越国(マレー半島南端にあったとみられる)に於いて遷化した。時に貞観7年享年67歳と推定、なお、親王出家後、その子女は在原朝臣の姓を賜っている。

ふじわらくすこ

藤原薬子(生年不詳~810)の変

藤原清成の女、藤原種継の妹とも伝わる。平城天皇の後宮に仕えた女官、藤原縄主と結婚し、三男二女をもうけたが、その長女が桓武天皇の皇太子安殿新王(後の平城天皇)の室に入った折、自らも東宮宣旨(天皇の命を伝える)をして仕えた。一時桓武天皇により退かれるも親王即位後、典侍、尚侍と昇進し、大同3年(808)11月従四位下しょうじょに昇叙、翌4年正月従三位に叙された。

平城天皇は健康を害し、弟、神野親王(嵯峨天皇)に譲位、弘仁元年(810)健康をとり戻した上皇は重祚(一度退位した天皇が再び皇位につくこと)を望む、薬子は兄、藤原仲成と共に平城遷都を図る。

官文も二分し、「二処の朝廷」を発生せしめた。嵯峨天皇は薬子を解官し、追散した。平城上皇は東国に向かおうとしたが、兄 藤原仲成は9月11日射殺され、上皇も剃髪するにおよび、薬子は毒をあおり9月12日自害する。

「薬子の変」は3日間で終結し、結果、高岳新王は皇太子を廃され、上皇の系統は皇位継承から完全に排除されることになった。

絵師 関良雪

良雪は、府中六所宮の社家鹿嶋田和泉正常の子として元禄16年(1703)生まれた。

本名は常麻呂といい、左内と称したが、のちに東岳道人・自然斎と号している。はじめは、鹿嶋田左内の名で神職として六所宮に勤仕していたが、延享2年(1745)8月、42歳の時、ふとしたことから事を起こして所払いとなり(六所宮における前代未聞の刃傷事件を起こしたことが原因)、以後、江戸へ出て上野寛永寺の子院に寓居(仮住まい)し、絵画に専念するようになったらしい。

良雪はやがて東叡山(寛永寺)の絵所(所属の絵師)となり活躍するが、多摩地区で専門の絵師となったのは、この良雪が最初と言われる。

彼は了月和尚について絵を学び「牧溪・雪舟に倣いて水墨画を善くす」とか、「狩野尚信の威風を興す」とか評されているように、牧溪や雪舟の系統をひく水墨画を得意とする、一方で江戸初期狩野派をも学んでいた。「良雪自画像」等あるが、作品はあまり多くない。

良雪は、明和7年(1770)府中に帰り、妙光院境内の旧西蔵寺跡に隠居、安永4年(1775)善明寺に宝篋印塔を建立し、安永5年(1776)8月15日に73歳で没し、墓は妙

光院墓地にある。なお、江戸時代後期の多摩を代表する絵師である関戸村(多摩市関戸)の相沢五流は、関良雪の弟子と言われている。

相沢五流：関戸村の名主、狩野派系の画師、江戸後期の文化人であった。

夢見地蔵

参道南側に東面される地蔵菩薩は珍しい「半跏思惟」のお姿をされている。この姿形は京都太秦の広隆寺の弥勒菩薩、奈良中宮寺の菩薩像が有名である。

この台座に刻まれた撰文(462文字)は萩野 鳩 谷(出雲松江藩松平出羽守治郷に仕えた儒者)の手によるものである。天明6年(1786)丙午10月1日出雲の国、下太夫江都 鳩谷信敏の銘がある

地蔵信仰に厳しい修行を積んだ「祖 順 尼」という、尼僧が安永元年(1772)壬申8月24日お地蔵様の夢のお告げを受け、そのお姿を妙光院に納めたと伝わっている。

祖 順 尼は伊勢桑名生まれ、19歳にして坂部邑遍照律院、光厳老比丘に従事、修行の末、武蔵国府中にいたる。

小野宮の医師、内藤重鎮が著した「往昔夜話」には「妙光院門前の地蔵尊は、願主(願い主)の比丘尼の似顔を刻せしなり、その尼、入 定(禅の境地に入ること)せんとし、生きながら地中に埋められしが、耐え難く人を頼みて掘り出されたり」とある。

土中 入 定 は即身成仏を願ったものであろう。「往昔夜話」は重鎮が祖父内藤重喬からの聞き書きをまとめたものである。

この地蔵尊が建立された天明6年には重喬は25歳、実際に祖順尼を見知っていたものである。

この内藤重喬は小野宮の小野神社の「小野宮廟碑」の建立に尽力した医師であり、この「小野宮廟碑」の碑文を書いたのも萩野鳩谷である。

この地蔵尊に「夢見地蔵」と命名したのは郷土史家比留間一郎と言われている。

安養寺

叡光山仏乗院安養寺と称す。天台宗。貞観元年(859)慈覚大師円仁の開山。

その後、勅命により永仁4年(1296)尊海僧正が再興。明治維新前には六所宮の別当寺であった。比叡山延暦寺の直轄寺。本尊は秘仏阿弥陀如来で蕙心僧都作と伝わる。

徳川家康より朱印15石拝領。現在の本堂は寛政元年(1789)再建され、明治初年頃まで寺子屋として使用され、明治8年当寺を仮校舎府中学校が成立、教育普及も担った。

観音堂は明治44年(1911)浅草寺より観世音菩薩の御分体を勧請して建立。

山門は高麗門様式と云う珍しい作りで天保4年(1833)の再建。

所蔵の書物2800冊。殆どは31世住職千葉亮泰の寄付によるものである。

関戸村生まれの相沢五流(1746～1822)の筆による涅槃図が残されている。

矢部甚五碑は氏の一周忌に建立。矢部甚五は三多摩農民運動の魁。大正10年(1921)府中多摩の小作人を糾合し、「府中多摩小作人組合」を組織。この影響は大きく、相次いで農民組合が結成され、大正15年(1925)「三多摩農民組合」が結成され矢部甚五が会長に就任。東京競馬場誘致に伴う小作地の補償問題にも尽力したが、昭和4年(1929)49歳で急逝。てん額は時の逓信大臣小泉又次郎。撰文は衆議院議員高木正年。

境内墓地には、直参旗本宮崎重俊、重勝、重成の墓石が並んである。

天正16年(1588)重俊の祖父宮崎泰景(元武田家家臣)の時、長男泰重、二男安重、三男景次が徳川家に集団仕官し、それぞれ多摩、府中に領地を与えられ直参旗本となる。長男泰重は多摩郡内に280石を拝領し、府中本願寺(車返村)を開基した。本願寺境内墓所に、泰重夫妻の墓石がある。泰重の長男が宮崎重俊である。天正19年(1591)以来、徳川家に使える。宮崎重勝は重俊の養子、慶長10年(1605)秀忠に仕える。重成は重勝の子、伏見・江戸の各町奉行を歴任した。

上林白草居(ウエバヤシハクソキョ)の句碑「鮎鷹(アユタカ)に黛(マズメ)ひくく多摩の山」白草居は本町御殿下にあった寺子屋原田義豊の子息として明治14年(1881)誕生。本名上林晋。高浜虚子主宰の「ホトトギス」の同人となり随筆「武蔵野雑記」を著す。句集「一期抄」を刊行。俳句雑誌「草」の主幹として後進の指導にあたった。

安養寺の狸のお坊さん

「新編武蔵風土記稿」の府中安養寺の条に「此処に奇談あり、尊海より第3世等海に随従せし狸あり」とある。高僧等海僧正を慕って筑紫の国から筑紫三位と云う男が来て、骨身を惜しまず小僧として3年修行した。或る日、うっかりして昼寝をして、狸の姿を僧正に見られてしまった。暇を申し出て、恩返しに釈迦の教えを再現したと云う話である。この話は府中市教育委員会より「狸のお坊さん」として絵本が刊行されている。

「昔、等海僧正という高僧のもとに、正体を隠して仕えていた狸の弟子がいました。ひょんなことから正体を知られてしまった狸は、引き留める等海に「人間に化けて3000年、御恩返しに2000年前お釈迦様に8年間仕えて教えを受けたことを実現しますので、明日人見原に来てください。ただし何があっても合掌せぬように」と言い残して去っていきました。翌日、等海らが人見原に行くと浅間山あたりに周囲を七宝瑠璃で飾ったお釈迦様の座した多宝塔が四方に輝き現れました。等海たちが約束を忘れて思わず合掌すると、目前の仏の世界はたちどころに消えてしまったということです。この狸が等海と別れる際に、3000年間仏の教えを書き留めた書を残していきました。」狸が書き残したとされるこの書は今も安養寺の寺宝として残されています。

妙見神社

祭神は妙見菩薩、北極星(北辰)を祀った小祠(小さな社)、元は競馬場内にあった。妙見菩薩は北極星あるいは北斗七星が神格化した菩薩で、その後ご利益は、国土を擁護し、災害を除けて人々の幸福を増すとされている。

建物内に小さな祠があり、「しゃもじ」を奉納して、祈願することから、「おしゃもじさま」と言われている。

参考

妙見信仰とは、一般的には仏教でいう北辰妙見菩薩に対する信仰と言うが、道教における星辰信仰、特に北極星・北斗七星に対する信仰である。

道教では北天にあって動かない北極星(北辰ともいう)を宇宙のすべてを支配する最高神・天帝として崇め、その傍らで天帝の乗り物ともされる北斗七星は、天帝からの委託を受けて人々の行状を監視し、その生死禍福(不幸と幸福)を支配するとされた。そこから北辰・北斗に祈れば百邪を除き、災厄(災難)を免れ、福をもたらされ、長生きできるとの信仰が生まれた。その半面、悪行があれば寿命が縮められ、死後も地獄の責め苦から免れないとされた。

馬頭観音

目黒競馬場の厩舎で火事があり、多数の馬が、焼死したため、その供養のため、建てられた馬頭観音が、昭和8年に競馬場が府中に移転の際一緒に移されたものである。馬頭観音は、観音菩薩の変化身の1つで、馬頭観世音菩薩、馬頭観自在菩薩、馬頭明王とも呼ばれている。密教では、悪人や敵を降伏させる修法(密教の祈祷などの法)の本尊とされ、俗には馬の守り神とされている。

民間信仰では、「馬頭」というところから、牛馬や家畜の守り本尊、五穀豊穰や道中安全の仏として信仰されたものである。馬の守護仏としても祀られるが、馬のみならずあらゆる畜生類を救う観音。また、衆生の無智・煩惱を排除し、諸悪を毀壞(こわしやぶること)する菩薩。

街道沿いの馬頭観音

馬頭観音の石碑は街道沿いではよく見かける、これは国内の流通が活発化し、馬が移動や荷運びの手段として使われることが多くなった。これに伴い、馬が急死した路傍や芝先(馬捨場)などに馬頭観音が多く祀られ、動物供養塔としての意味合いが強くなっていった。

馬霊塔

競馬場北側には、現役のまま不幸にも怪我や病気で亡くなった競走馬を供養するために建てられた馬霊塔がある。

この塔の両側には十数もの石碑が建っていて、レースに10戦全勝して「幻の馬」と呼ばれた「トキノミノル」のほか、東京優駿大競争で優勝した「ガヴァナー」など歴代の名馬の名前が刻まれている。

幻の名馬 トキノミノル 1951年ダービー優勝馬
ガヴァナー 1935年ダービー優勝馬

東京競馬場

昭和8年(1933)11月目黒競馬場から府中に移転し、東京競馬倶楽部東京競馬場となる。

昭和12年(1937)6月東京競馬倶楽部解散し、日本競馬会東京競馬場となる。

昭和29年(1954)9月日本中央競馬会設立。国より競馬の業務を引き継ぐ。

昭和53年(1978)4月美浦トレーニングセンター完成し、厩舎関係者移転完了。

東京競馬場で開催される G1 レース

フェブラリーステークス(ダート)

NHKマイルカップ(3歳馬限定)

ヴィクトリアマイル(古馬牝馬限定)

オークス(優駿牝馬、3歳牝馬限定)

日本ダービー(東京優駿、3歳牡馬限定)

安田記念(農林水産省賞典、国際招待競争)

天皇賞(秋)

ジャパンカップ(我が国初の国際招待競走)

目黒から移転の経緯

敷地が6万余坪しかなかった目黒競馬場は、拡張の余地がなく、大部分が借地であり、地主から地代の値上げを要求され又、一部町会議員から移転論まで出ていた。東京競馬倶楽部としては、他の土地に移転するほかないとの結論に至り候補地の選定に入った。羽田の埋立地、浅間山周辺、小金井カントリークラブ周辺等。最終的に府中に決定した。その理由としては、地元の協力態勢、水質とその豊富さ、景色の良いこと等であった。競馬場誘致には小川純一町長や府中多摩農民組合長矢部甚五(安養寺に顕彰碑)等関係者の尽力によるところが大きい。買収用地24万坪(約79.3ha)買収費159万5千円。昭和8年(1933)11月8日竣工式挙行。工事は清水組(現在の清水建設)が落札施行した。

井田摂津守是政の墓所

競馬場第4コーナー付近の場内に榎の大木がある。ここには府中是政を開拓したと云う井田是政の墓地がある。かつて井田是政は畠山重忠の子孫で三河に移り、井田姓を名乗り、その後、後北条氏に仕え、天正18年(1590)八王子落城後、府中に移住したとの伝承があった(新編武蔵風土記稿卷九十一)。しかし競馬場内の井田氏墓所から33基の板碑が出土し、最古のものは永仁3年(1295)の銘があり、元弘3年(1333)へと続いている。又、深大寺の学僧、長弁が著した「私案抄」には井田新左衛門尉政家と井田雅楽助忠行が営んだ法要の際の応永3年(1396)2月の諷誦文なるものが記載されている。井田氏の祖先と推定される。「井田氏は、鎌倉時代からこの地に連綿として続いた土豪として捉えた方が妥当であろう。」

諸説あり。